

序

須原英士雄先生は、京都大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程を1969年に単位取得満期退学をされ、京都大学助手や近畿大学専任講師を経、74年に本学文学部の地理学専攻の助教授として赴任されました。82年には教授に昇任され、以降、32年という長い期間を本学の教育、研究ならびに行政に力を尽してこられました。この間、専攻の主任をはじめ、二部協議会学生主事、文学部主事（副学部長）さらには文学研究科主事という役職を歴任され、学部・大学の発展に寄与されてきました。

一方、先生は、人文地理学会、日本地理学会など多くの学会でご活躍され、特に、ご専門の商業地理学、都市地理学の分野において、数多くのめざましい成果をあげておられます。2005年には、日本地理学会から「永年会員功労賞」の表彰を受けられました。

また、兵庫県川西市・三木市、大阪府摂津市、京都府向日市・長岡京市といった自治体の市史編纂事業に執筆委員として加わり、市史執筆に携わってこられました。その他、先生のご業績につきましては、本論集の「主要著書・論文目録」に詳しいので繰り返しません、先生のご研究の幅の広さ、深さがここに記されています。

さらに、先生は、その教育・研究を通して優秀な研究者を多くお育てになりました。次の時代の地理学を担う人材が、先生の教えを受け、広く活躍しています。

須原先生は、大変に控え目なお人柄で、私の拝見した限りでは、会議などにおいて積極的にご意見を言われたり、自説を強く主張されたりしないように見受けられます。しかし、一、二度のことですが、私は先生から「寸鉄人を刺す」といった感のあるお言葉を耳にしたことがあり、よく情勢や人間を見ておられると思い入りました。

地理学（特に人文地理学）は、本来、人文学の様々の分野の題材や方法などを総合的に用いて研究する学問と思われれます。学際的という言葉が、広く一般的に使われる以前から、地理学は最も学際的な研究であったでしょう。人間の暮らしと文化の基いを考究する学問なのです。須原先生の、1月19日におこなわれました最終講義をお聞きし、よりこのことを実感いたしました。先生の控え目ながらも、時に短い言葉で的を射たことを指摘されるのも、地理学のもつ学問的特徴と無関係ではないと思われました。

こうした意味からも、大学を取りまく状況が厳しさを加えるこの頃、先生がご定年を迎えられることは残念でなりません。今後共、どうぞよろしく文学部や地理学専攻へのご助言をいただきたく願っております。

学校法人立命館は、須原先生に名誉教授の称号をお贈りし、その長年のご貢献を賛えます。本会は、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、ご定年を記念する論集を編み、先生に献呈させていただきます。ありがとうございました。

2006年1月

立命館大学人文学会会長

文学部長 木 村 一 信